

保育士養成校におけるピアノ基礎学習指導の考察

マルチタスクな活動を通して

鎌田 千佳

Consideration of Piano Basic Educational Guidance at Training Schools for Childcare Workers
through the multitasking activities

Chika KAMADA

キーワード：ピアノ、リズム、拍、指導法

1. はじめに

女性の社会進出の拡大に伴い共働き家庭が増加し、その結果子供を保育園等に預けなければならない家庭が増えてきた。都会では待機児童問題もなかなか解決の方向に向かっておらず、その一因として保育士不足もクローズアップされてきている。

平成 27 年度まで一部の地域を除き年 1 回の実施であった保育士国家試験も、本年度(平成 28 年度)より全国的に年 2 回の実施となり、保育士人材確保に向けた国の取り組みは評価される。

しかし、保育士国家試験においては音楽実技は必須項目とはなっておらず、そのため保育現場における生の音楽とのふれあい環境の減少が懸念される。

多くの保育士養成校においては、ピアノ演奏技術の習得に力をいれており、近年特に「弾き歌い」の演奏の技術向上を習得目標におく指導者も多くなっている。

筆者は保育現場での子ども達の情操教育に音楽は重要な役割を果たしていると確信して

おり、中でも「弾き歌い」の重要性を近年、より強く感じるようになった。

そこで本稿では、筆者の実践をとおして学習者の「つまずき」からみるピアノ演奏技術指導法を考察してみたい。

2. 学習者(学生)の「つまずき」

筆者は当校(千葉敬愛短期大学)で器楽Ⅰ、器楽Ⅱの授業においてピアノ実技を指導しているが、その経験から言えることは、学習者(学生)はピアノ経験者もいれば全くの初心者もあり、その時点での演奏レベルは様々であるが、いずれのレベルであっても学習過程のある段階で「つまずく」者がでてくるということである。ここでいう「つまずき」とは、正しく読譜できないこと、正しくリズムが表現できないこと、つまり正しい演奏ができないことである。

これは、初心者か経験者かの違いで生じるのではなく、また、同じ課題で生じるわけでもない。

筆者の経験から、ピアノ演奏法の基礎課題(例えばバイエルやブルグミュラー)を終え、

譜例 1 おべんとう

左手は軽くスタッカート気味に

おべんとう うれい な おても さいに なりまし たで みんな そろつて ごあいさつ よくかんで みんな そろつて ごあいさつ

譜例 2 おかえりのうた

左手は軽くスタッカートぎみに

1 きょうもたのしく きました なかよしこよで
2 おりがみつみきも かたづけて おかえりおたく
かえりましょう せみさん さよなら またまたあした

次の「弾き歌い」の課題に入ってから初めてこの「つまずき」を経験すると、修正のために必要以上の時間を要してしまう傾向となり、最終的に到達目標に達しないこともあり得る。

3. 付点音符の理解

3-1. 事例

この「つまずき」は、バイエル等のピアノ

演奏法の基礎課題の終了後に取り組む「弾き歌い」の課題の中の付点音符が使用されている曲で主に生じる。

その例として、「おべんとう」(譜例1)と「おかえりのうた」(譜例2)を挙げる。

「おべんとう」では、学習者の付点音符のリズム ♩ と8分音符 ♪ とのコンビネーションの表現に困難が認められる。(○で囲ん

譜例 3 バイエル 88 番 冒頭



だリズム)

「おかえりのうた」では前奏の4拍目の8分音符を正確に左手の伴奏の4分音符の裏拍に入れる演奏ができず(↓で示す)、多くは16分音符のように遅れてから演奏する傾向にある。

これらの原因として「付点音符」の理解の不十分さとその演奏技術の未熟さが考えられる。

これらの「弾き歌い」の課題によく出てくる付点音符のリズムは、すでに終了した基礎課題であるバイエル88番(譜例3)にでてくるものである。つまり、基礎課題の学習理解が十分できていなかったものと推測される。

3-2. 付点音符理解のための拍

付点音符の理解には、まずリズムの元である「拍」の習得が重要と考える。

「拍」とは、拍子の単位で、音楽の時間的継起における基本単位をいい、心拍のように継続されている一定の刻みである。

そして、「拍」にはアクセントをもつ強拍とアクセントをもたない弱拍とがあり、強拍が周期的に繰り返されると「拍子」が生まれる。

これら拍、拍子の中から音符の組み合わせ(型)で表される「リズム」が生じるのである。

この「拍」の感覚(以後「拍感」という)を体で覚えていくことにより「拍感」の安定性が培われ、付点音符を含むあらゆるリズムへの正しい理解と正しい演奏につなげることができると考える。

4. 『リズム演習』

先に述べたように、ピアノ実技の課題に取り組む学習者は難易度があがるにつれてリズムの複雑さに戸惑い、正しい演奏に到達するまでに時間を要することになる。特に初心者の場合は音の高低を読むだけで精一杯であり、課題1曲の習得までに予定以上の時間を要する傾向にある。

その対策として筆者は「音楽における総合的基礎力」(ソルフェージュ力)の一要素である「拍」に焦点をあて、そしてできるだけ早期の「拍感」の習得が望ましいと考え、本校でのカリキュラムで弾き歌い課題に入る前のピアノ演奏課題の学習時に、以下の要領で『リズム演習』を取り入れてみた。

4-1. 対象

担当の1年生12名(各6名ずつ2クラス)
(内訳)

・レッスン経験未経験:2名

- ・ レッスン経験 1 年未満：4 名
- ・ 過去にレッスン経験 3 年以上：2 名
- ・ 入学時までレッスン経験 5 年以上継続：4 名

4－2. 課題演習期間と時間

第 5 回目から第 14 回目までの 10 回の授業で実施。(5 月～7 月)

それまでにピアノ演奏学習に最低限必要な音楽理論—音符と休符の名前や長さ、階名、音名など—をプリント教材を使用して講義。

90 分授業内で個人実技課題の最低必要時間を確保するため授業開始から最長 10 分間と設定。全員で同時に演習。

4－3. 課題達成目標とそのねらい

生活の歌、「おべんとう」「おかえりのうた」の弾き歌いが正しく演奏できる安定した拍感の習得と正しいリズム理解。

- 安定した拍感を身体で覚え、様々なリズム、テンポの曲を最初から最後まで同じテンポで正しく演奏できるようにすること。
- 16 回目の授業より始まる弾き歌いの課題で言葉（歌詞）によってリズムが崩れないように一定の拍感を失わないようにすること。

4－4. 課題の作成

音符や休符の名前と長さの理解度と、ピアノ実技課題の進行状況を見極めながら毎回その理解度に合わせて筆者が作成。

課題はプリントを配るのではなく、後述の

目的で各自で課題を板書させた。

板書時間を含め演習時間を考慮すると 4 小節課題が最適と判断し、①②それぞれ 1 題ずつ、計 2 題を 1 回の授業で演習。

① 4 分の 2 拍子（あるいは 4 分の 4 拍子）

② 4 分の 3 拍子

板書のねらいと効果：

過去に実習先の園から渡された手書きの楽譜に多くの不明な点が見られ、学生が準備（練習）に戸惑ったことがあった。現場で楽譜を自分で用意しなければならないことも想定し、正しく楽譜が書けるようになることが第一の目的である。

しかし実際に小節線をひいたり音符を書くことにより、教材のプリントなどを読んで学ぶ講義より的確に、かつ短期間で音価を理解できる副次的な効果もみられた。さらに、ピアノ演奏課題の正しい譜読みと演奏にもつながった。

これは音価に合うように小節内に音符を配置させることにより、拍を目でとらえることによって、その 1 拍の中にどのようなリズムが発生しているかが映像的に理解されるからだと考えられる。

「見て（読んで）」覚える活動に加え、「書く」という活動を同時に行うデュアルタスク効果であろう。

4－5. 演習方法と実践効果

第 1 回目に『リズム演習』のやり方の説明と試演、第 2 回目以降は前回出題した課題を「a 基本型」と「b 持ち替え型」の 2 パターンで演

譜例 4



習し、次回のための2つの新しい課題を板書する流れで進めた。

拍の刻みと拍子が同じ課題から取り組み始める。(譜例4)

a, 基本型

上向きの棒の音符を右手
下向きの棒の音符を左手
拍子を8分音符単位で刻み「いち ト に ト」と口に出して数えながら机の上をたたいてリズム打ちする。

この方法は楽譜を「見て」あるいは「読んで」、拍子を「声に出して数えて」、手で机を「たたく」運動という3つの違う活動＝マルチタスク活動でひとつの目的である基本の「拍」を習得する演習である。

まず下向きの音符を左手の机をたたく運動と裏拍も意識する数え方を口で言う2つの事を試演。拍の意識を強め拍の安定感を感じさせる。

次に上向きの棒の音符を右手で机をたたく運動も加え楽譜のリズムを表現する。この時、左手で机をたたく音と右手でたたく音が同じであることで、客観的に音を聞き分けることができず混乱がみられたため、右手に鉛筆を

持たせた。

右手に鉛筆を持たせた意図は、たたいた音が固い方が耳に入りやすく「リズムが複雑な方＝メロディ」の意識と合い、その複雑さを表現するには利き手である右手¹の方が細かい運動が行いやすいのではないかという考えからである。

その結果、音の種類が変わることで上向き音符と下向き音符のリズムの聞き分けが楽になり達成度もあがった。

また、机をたたく手の位置を体から手前の方と離れた先の方にずらすことにより(図1)さらに短時間での正確な表現が可能になった。これは「右手が上」「左手が下」という楽譜の見方と、自身の手の位置の一致を体感し、“どの音符をどちらの手で表現するのか”という脳からの指令の确实性が増したのではないかと推測する。

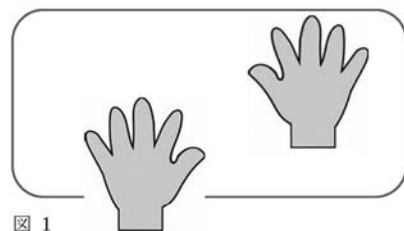


図 1

¹ 今回 利き手が左手の場合の実践例はない。

b, 持ち替え型

基本で確実にリズム打ちができると判断した後、鉛筆を左手に持ち替える。

上向きの棒の音符を左手（鉛筆を持つ）

下向きの棒の音符を右手

左手を体から離れた前方に、右手を体に近い手前に準備

拍子は基本と同じく声に出して数えながらリズム打ちする。

ここでは、先の演習と同じ目で楽譜を見るのだが、運動させるために脳から指令を出す先が左右逆となるため、「交差の意識」が必要となる。

同じ課題にも関わらず、「a 基本型」より「b 持ち替え型」の方が明らかに達成率が低く、「b 持ち替え型」を反復練習することで、利き手ではない左手¹への意識を高く持てるようになったのではないかわかれ、ピアノ演奏時の手、指の独立運動の効果につながる例もみられた。

譜例4のような拍と一方の手の運動が一致しているリズム課題でも、初めはすぐに両手ではできず、片手ずつの練習が必要であった。また、当初拍子を口で数えることを忘れてしまう学生もいたが、これはマルチタスクに慣れていない（個人差によるが）ことが原因と思われる、その後の数回の授業後には全員が必ず声に出して拍子を数えられるようになった。

ただ、この段階での結果は演習方法の理解の証明とはなるが、拍感の習得、音価の理解

度の証明にはまだ至っていない。

この頃から、練習により成果が出せるという意識も高くなり、授業前に皆で準備（＝練習）をするようになったことは副産物である。

正確にリズム演習ができた時の達成感を素直に表す学生の姿もみられ、それは各自のモチベーションの向上となり、この演習だけではなくピアノ課題演奏技術の向上にもつながる良い影響もみられた。

演習第5回目以降、譜例5、譜例6のように徐々に細かい刻みや付点音符を含むリズムを取り入れ、一方の手のリズムが同じ音符・リズムの繰り返しにならないように課題作成にも工夫した。反復演習を伴いながら、10回目では譜例7、譜例8のリズム演習課題を試みた。

譜例7は「おかえりのうた」（譜例2）の前奏のリズム、

譜例8は「おべんとう」（譜例1）の歌に入ってから（5小節め～8小節め）のリズムのバリエーションである。

4-7. とりあえずの結果と分析（中間評価）

最後の授業（第10回目）でねらい通りの成果がでたかどうか、この日以降夏期休暇に入るためこの日を区切りとした。ここで4-3の課題達成目標である2曲を基にした『リズム演習』（譜例7、譜例8）で判断してみた。

正確にできたか：

2題とも

ア) 1回めで、a,b,両パターンできた：3名

譜例 5



譜例 6



譜例 7



譜例 8



イ) a の基本 (右手が上) は 1 回で、b (左手上)

は 3 回目までにできた : 6 名

ウ) a,b, 両パターン 3 回目まででできた : 1 名

エ) (譜例 7)、a,b, 両パターン 3 回目まででき、
(譜例 8)、a は 3 回目までにできたが b は 3
回目までにできなかった : 2 名

オ) a,b, 両方 3 回目までにできなかった : 0 名

a 基本型は 12 名全員 3 回目までで正確にでき、
1 回めで a,b, 両パターンできた 3 名は全員ピアノ
レッスン 5 年以上経験者であった。

この結果からだけでは、『リズム演習』のね
らいである「拍感」の定着の証明とはならない
であろうが、ソルフェージュ力の習得度の
目安にはなるであろう。

1 回目で a,b, 両パターン正確にできた 5 年

以上のレッスン経験者は、全員ピアノ演奏課題
ですでに難易度の高い曲を学習中で、ソル
フェージュ力も多少あった。しかし実際には
「拍感」にまだ不安定さが感じられ、頭で理論
はわかっているにもかかわらず表現できてい
なかった。

しかし、並行して行った『リズム演習』に
より、拍感の安定に明らかな効果が見られ、
ピアノ課題も安定していった。

『リズム演習』実践終了後、弾き歌い課題の
取り組みが始まったのだが、教材の中から各
自で課題を選曲するため「おべんとう」「おか
えりのうた」に取り組んだ学生は全員ではな
かった。しかし、1 回目で両パターンできた 3
名は 2 曲とも問題なく達成。2 名が「おべん
とう」に取り組んだが、リズムの理解も正しく、

弾き分けることもできていた。

この結果と過去の「つまずき」時における学習者の様子とを比べてみると、『リズム演習』は「拍感」を含むソルフェージュ力の習得に確かな効果があったといえる。

他の7名の弾き歌いの課題「おべんとう」「おかえりのうた」はまだ聴けていない。

5. まとめ

ソルフェージュ力の向上はピアノ演奏技術の習得の質と量に比例する。

「現場で役に立つ演奏技術習得」を目指し効率よく基本を習得させるために実践した『リズム演習』は、今年担当した学生12名の半数にあたるレッスン1年未満の6名全員がピアノ実技課題を達成し、かつ、そのうち半数以上の4名は余裕をもって次の課題に進んだという実績をもたらした。

ただし、『リズム演習』の課題の難度があがるにつれ、学習者の達成度には多少のばらつきが当然みられた。このばらつきが見られ始めた頃に、個人的に時間をかけた指導ができれば理想的であろう。

今回3か月—10回で区切りをつけたが、このような演習は継続することで効果も大きくなると思われる。

引き続きこの『リズム演習』を取り入れた授業展開をしながら、更に「限られた時間内」という条件の中での効果的指導法の工夫が必要であると考ええる。

【引用文献・参考文献】

幼稚園教諭・保育士養成課程「幼児のための音楽教育」：教育芸術社

BEYER：EDITION PETERS

新音楽辞典：音楽之友社

鈴木由美子：「初等教育課程教員及び保育士養成校における音楽基礎力充実に関する一考察～読譜力へのアプローチ～」千葉敬愛短期大学紀要、第36号